

中央にある紋様は五つの丸が複雑に絡み合っていますが、今まさに開こうとしている花のつぼみを象徴しています。福音のメッセージが日本の地においてこれまで以上に花開くことを願ってのデザインです。」

■ 教会学校 ---- 12月17日(日) 11:00 ----

10月から始まった教会学校も今日で3回目。ラウル神父様と一緒に「天地創造」「アダムとイヴ」「ノア方舟」を学んだ。聖書のお勉強の後は楽しい遊びの時間。学校の宿題を持って来たり、青年たちと遊んだり、あっという間に12時のお帰りの時間を迎える。解散時間を迎えると「いやだ～帰りたくない～」と言う子ども達の声に嬉しい悲鳴をあげながら、おとなも子ども達と一緒に楽しい学びの時間を過ごしている。17日は待降節ということで「スノードーム」を作ってみんなでクリスマスを楽しみに待つ心を味わった。1月以降も月に一度教会学校を予定している。1月は「カトリックかるた」に挑戦!

## あゆみ

No.87 教会運営委員会

講座「知ってるつもり?! 典礼のしるし、ことば、動作」

指 導 主任司祭 ラウル神父  
開催日時 2018年1月13日(土) 午前10時～11時  
会 場 カトリックセンター研究室

※ 事前に準備するものではありません。お気軽にご参加ください。



# 双塔

カトリック新潟教会

2018年1月  
No. 356

## ガリラヤのナザレ

協力司祭 鎌田耕一郎

(ガリラヤのナザレ) 暴君ヘロデは紀元前4年に死んだ。史家は彼の死後間もなく月食が現れたと報じており、それは前4年の3月12日に起こったことが計算されている。ヘロデは晩年の数か月をカリルローの温泉とエリコで過ごしており、博士たちはそれに先立ってエルサレムで会っている。従って博士たちの訪問は少なくとも紀元前5年、イエスのご誕生はおそらく紀元前6年であったとかがえるべきであろう。この計算では、幼子イエスが故郷に帰ってきたのは、生後8か月から18か月の頃であったと想像される(ダニエル・ロップス)。

ヨセフが夢に天使の告げを受け、エジプトから帰った聖家族が選んだ土地は、ヘロデ・アンティパスの領地、ガリラヤのナザレであった(マタイ2・19以下)。イエスが公生活を始める日まで、そこで生活され、その名を冠して「ナザレのイエス」(マルコ1・9、ヨハネ1・45)と呼ばれた。

ユダヤ地方の峻厳な景色とは対照的に、ガリラヤは平和と豊かさの印象を与える。このような美しい自然に抱かれて幼子イエスが成長されたことは、私たちの心に、やさしい喜びを感じさせる。その自然は種まく人、からし種、ぶどう畑、そして野のゆりなどの美しいたとえ話をイエスのみ心の中に育んだであろう。ヒエロニムスは、ナザレを「ガリラヤの花」と呼んでいる。

(ナザレの神秘) ナザレでの生活は、イエス12歳の時の事件を除いて、すべて神秘と沈黙のベールに覆われている。勿論、いくらかの事は推察できる。その生活は貧しい人びとと同じものであったろう。聖書のたとえを見ると、イエスが、金持ちや地上の権力者には無縁であったことが分かる。また「大工の子」(マタイ13・55)と呼ばれたように、ヨセフの職業であった仕事を学んだに違いない。そして、ヨセフの死後、生活のための単調な労働に明け暮れる日々を送られたであろう。幼子は少年となり、青年となる。その成長が健やかなものであったことは、「イエスは知恵も増し、背たけも伸び、ますます神と人ともに愛された」(ルカ2・52)という証言がある。

だが、「イエスが限りなく親切な男とみなされながら、実際の友人を一人ももたなかったという考えを追い払うことは出来ない」(ヴイルラム)。人々はその親切や、ラビたちを驚かせた知恵や(ルカ2・47)、あるいは、大工の息子はなぜ妻をもたないのかと噂していたかも知れない。彼らはこの大工の子が、自分たちとどこか違うことをおぼろげに感じとっていたに違いない。神と人間との差は無限であり、イエスの中には、聖母すらも入り得なかった神秘があったのである。

それ故に、ナザレの町の片隅で「一家は、沈黙のうちに神秘を見つめていたのである。神秘を思いめぐらす習慣は、ここに、三位一体の息づいている、このナザレの闇の中に始まったのである」(モーリヤック)。

——菊地司教様、東京大司教任命、着座——

教皇フランシスコは、10月25日正午（日本時間同日午後7時）、ペトロ岡田武夫・東京大司教の定年による引退願を受領し、後任として、新潟教区のタルチシオ菊地功司教を東京大司教に任命された。

菊地司教様は12月16日（土）、東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂にて東京大司教として着座された。なお、菊地大司教様は同日付で、教皇庁福音宣教省より新潟教区管理者に任命された。次の新潟司教が任命されるまで、東京大司教との兼務となる。※新潟教区管理者代理として大瀧浩一師（教区事務局長兼務）を任命

■ 王であるキリスト・菊地司教様最後の公式訪問 ----- 11月26日（日） 9：30 -----

この日「王であるキリストの祭日」は菊地司教様の新潟教会最後の公式訪問日となった。ミサの説教の中で司教様は、この1ヶ月ほどの間にご自身の身に起こったことを振り返りながら、「人生はすべてが人間の思い描いた通りになるわけではなく、最後は神の計画が実現されていく。私たちの人生は神の手の中にあるということをお願いされた」と語られた。ミサ後に聖堂内で司教様を囲んで記念写真を撮り、その後会場をセンター2階に移して「王であるキリストの祭日」のお祝いと、菊地司教様への感謝の集いが開かれた。感謝のメッセージが入ったケーキのカット、教会学校・青年会・聖歌隊の皆さんの歌、司教様ご提供品を優勝景品にした「じゃんけんゲーム」と和やかな時間を過ごした。最後に司教様が作詞作曲された「主とともに」を司教様のピアノ伴奏で合唱し閉会した。残念ながら年頭から予定されていたローマでの会議のために、司教様は後ろ髪を引かれる思いでイタリアへと旅立って行かれた。

■ 菊地司教様新潟教区離任ミサ ----- 12月9日（土）9：30 -----

秋田・山形・新発田・長岡地区からいらした信徒の皆様、神父様方、修道会の皆様とご一緒に、菊地司教様新潟教区離任ミサが行われた。内陣いっぱいには並べられた神父様方と共に、みんなで心をつなげて司教様への13年間の感謝を込めてミサに与かった。お説教では司教様が祭壇の前に進まれて「いつもは原稿を準備しているのですが、今日は原稿を用意せずに話します」と前置きして、ご自身が東京大司教として着座した後の新潟教区は当面どのような体制で運営されることになるのかを説明された。そして、司教職のモットーに選んだ「多様性における一致」について、その背景としての神言会の霊性を紹介して下さった。すなわち、神言会は第一に「宣教する」修道会であること、また教会が十分に育っていないところでパイオニア的な役割をするということ、第二が「多様性における一致」。「宣教する」ためにはいろんな国の人と一緒に働く。たとえば名古屋にはいろんな国の出身の人がいて、皆日本語で会話し、一致して福音宣教のために働くという多様性における一致がある。東京でも、この同じモットーで行くつもりだと語られた。信徒皆で、新天地に移られる司教様の上にこれからも神さまの豊かな祝福とお導きがあるように祈った。センター2階では約100人が参加して、立食形式で祝賀茶話会が開かれた。入れ代わり立ち代わり司教様を囲んで談笑し、記念写真を撮影し、感謝を伝えたり名残りを惜しんだりする姿が見られた。

■ 月曜会ミサ ----- 12月11日（月）11：00 -----

毎月1度の「月曜会」のミサ。いつもは小聖堂に10数名ほどが集まってささげているが、この日は菊地司教様が新潟司教としてささげる最後のミサとあって、月曜会のメンバー以外も含め30名超の参加があった。説教では、ご自身の神学生時代からの聖母とのかかわりを紹介。「もうこれでロザリオの祈りに出席しなくても済むと思ったら、ガーナで派遣された先が“ルルドの聖母”教会で、そこでも聖母とのかかわりがあった…。神は、一度かかわりのあったものを決して見捨てることはない」として、ロザリオの祈りや霊的花束の習慣を是非残してほしい、と結ばれた。このミサの後、菊地司教様は新潟を離れ、東京へ向けて出発された。

■ 東京大司教着座式 ----- 12月16日（土） 11：00 -----

都内在住者にとっては肌寒かったようだが、新潟から見れば小春日和のような穏やかな晴天。着座式会場の東京カテドラル関口教会には朝から多くの人が詰めかけ、2500人ものが集まった。

菊地功大司教様の着座式は、教皇大使ジョセフ・チェノット大司教様を始め日本の司教団のほか、韓国ソウル教区のアンドレア・ヨム枢機卿様、韓国軍教区のフランシスコ・ザビエル・ユー司教様、東京教区との姉妹教区であるドイツのケルン教区のウェルキ枢機卿様の名代として、補佐司教のドメニクス・シュヴァデラップ司教様、さらに菊地大司教様が宣教師として8年間派遣されていたガーナから首都のアクラ教区のチャールズ・パルマー・バックル大司教様ほかお二人の司教様、それに大瀧神父様、ラウル神父様、ロレンゾ神父様、ナジ神父様、名古屋から駆け付けたフェルディ神父様、マーティン神父様を始め150名をはるかに超える司祭団の入堂で始まった。

入祭のあいさつに続き、「みなさん、こんにちは」と語りかけられたチェノット大司教様は「今から、任命書をラテン語で朗読したいと思います」と前置きしたうえで朗読。その後日本語の翻訳文が朗読された。続いて新しい紋章が司教座に掲げられ、菊地大司教様は東京大司教として着座された。全会衆が聖歌「ひとつになろう」を唱和、その後、前任者の岡田大司教様から菊地大司教様にバクルス（司牧杖）が手渡され、ことばの典礼が続いた。

ミサの結びには、来賓のあいさつに続き、ガーナ共和国大統領の祝辞を同国大使が代読。また同国大使夫妻からのプレゼントも贈られた。また、子どもたちから岡田大司教様と菊地大司教様にそれぞれ花束が贈られた。

ミサ後は関口教会敷地内3カ所に分かれての祝賀会。菊地大司教様は侍者2人を伴ってそれぞれの会場内をめぐり、出席者とあいさつを交わされた。そこかしこで、大司教様に祝辞を述べる姿や記念写真を撮影する姿が見られた。



「多様性における一致」

わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。  
 （ローマ12・4-5）  
 ~着座記念のカードより~

【紋章とその説明】

菊地大司教様は、新潟司教であった時の紋章にわずかな変更を加えたものを用いられる。「紋章は伝統を重んじながらも、非常に現代的なデザインを配するという、『多様性』を具現化したものとなっています。紋章の周辺部は伝統的なデザインを踏襲しています。中心部分は、四つに分かれています。左上部分と右下部分は、実際には青の背景に黄色の波のようなものが描かれています。青は海でもあり空でもあります。波のように見えるのは、開かれた聖書です。すなわち聖書のみ言葉が、世界中に広がるようにとの願いを表しているものです。左下部分と右上部分には、五つの丸が描かれています。これは世界の5大陸を象徴すると同時に、人間の体も象徴しています。すなわち一つ一つの共同体（一つの丸）が集まって、一人の体（キリストの体）を形成していることを象徴しています。ちなみにこの丸の色は、ブドウの色に近い赤にしてあり、キリストはブドウの木、私たち一人ひとりはその枝である、という聖書のイメージを表しています。